

青森県立郷土館だより

News from the Aomori Prefectural Museum

通巻140号 平成19年(2007)4月1日 Vol.38 No.1

清朝末期の芸術と文化

北京故宮博物院展

2007年3月24日(土)～4月22日(日)

主催：ATV青森テレビ 青森県立郷土館

【料金】一般：1,500円/高校・大学生：1,200円/小・中学生：無料



すいれんちょうせい

垂簾聴政の間 (再現)

中国の北京故宮博物院は、明・清朝の宮城であった旧紫禁城内の遺構をそのまま利用した、世界でも有数の規模とコレクションを誇る博物館です。また、1987年にはユネスコの世界文化遺産にも登録されました。

これまで同博物院の所蔵品による展覧会は、国内でも数多く開催されてきましたが、今回の展覧会では清朝末期の宮廷に焦点をあて、西太后と清朝最後の皇帝溥儀ふぎに関わる資料を中心に紹介します。

西太后がまつりごとを行った「垂簾聴政(すいれんちょうせい)の間」の復元をはじめ衣装や宝飾品、溥儀が愛用した自転車、眼鏡などゆかりの美術品や貴重な資料約120点が展示されます。

映画やドラマ、小説などにたびたび取り上げられ、日本でもよく知られている二人の足跡をたどるとともに、宮廷内での生活の様子や当時の社会的背景なども合わせて紹介します。清朝末期の宮廷芸術と文化にふれるだけでなく、中国の近代史を知ることができる内容となっています。



じき

慈禧太后
(西太后) 朝服像



土曜セミナーより

(12月2日実施) 遊びの民俗

北川 達男



オシラサマ (当館所蔵)

「子どもに夢を」と児童文学者を志した北彰介先生

は、昭和29年「…下川原焼…焼く直前のハト笛を見た瞬間に、幼い日の温かな気持ちがよみがえり、」「心の故郷」を感じ、郷土玩具の収集と、子ども達の遊び方の研究を始めました。

遊びは、子どもの特権のように思われますが、大人も遊びます。また、カミサマも遊びます。古くは家の主婦が、イタコが一对のオシラサマを手にとり、祭文をあげ、神託を述べることを、オシラサマを遊ばせると称します。ヒトとオシラサマに使っている「遊び・遊ぶ」とは、何なのでしょう。遊びは、生産活動などの日常生活と干渉—緊張関係にあります。遊びの世界だけで考察してみます。

中世の俗歌を集めた『梁塵秘抄』に、(遊女のうた)「遊びをせんとや生まれけむ／戯れせんとや生まれけん／遊ぶ子どもの声聞けば／わが身さへこそ揺るがるれ」とあります。ひとは、遊ぶために生まれたとも、解釈できます。

西洋の遊びの源流思想として、哲人アリストテレスは、「スコレー (遊び) が知的探求をともなう自由な時間、つまり、経済的、時間的な束縛がなく、かつ自給的な(行為そのものが新たな行為を生み出す)活動」であり、「幸福はスコレーのうちにあると思われる」という有名な一説があります。ドイツ古典主義者フリードリッヒ・シラーは「人は遊びの中で完全に人である」と述べています。ホイジンガは、人間を意味する『ホモ・サピエンス』(=知識を有する存在)を『ホモ・ルーデンス』すなわち「遊ぶ存在」としていますが、これは「遊びをせんとや生まれけむ」と通じます。

漢字の「遊」は、辞書『漢字源』によると、「きまった所にとどまらず、ぶらぶらする。旅をしてまわる。あそぶ。すきなことをして気らくに楽しむ。あそばす。よりそって動かせる」であり、また、数ある熟語の中に、「遊行」があります。その意味は、「游行。ぶらぶら歩きまわる。僧侶ノリョが諸国をまわること。行脚ノギヤ。雲水。」ですが、『民俗学辞典』(柳田國男監修東京堂)では、「遊行者は、単なる修行者ではなく、神や仏のヨリマシ、少なくともその使者」と民俗の事例から解釈しています。つまり、遊行しているのは、神だということです。象形文字としての「遊」は、依り代に憑いた神、常には現れない神が動くことだそうです。漢学者白川静は「すべて自在に行動し、移動するものを遊といい、もと神霊の遊行に関して用いた語である」と提示しています。遊は、神の領域から使われた言葉だということです。

民俗学者でもあった折口信夫は、「遊部」を例にとり、「遊部は、幽頭の境を隔て、凶魂を鎮めるの氏なり。」から、「遊び・遊ぶ」は「鎮魂の動作」であるとしています。オシラサマを遊ばせるときの「遊び・遊ぶ」は、「遊行」・「依り代に憑いた神」・「鎮魂の動作」の日本古来の意を持つ、現代の他には残っていない貴重な用例といえます。

遊びの源を「神の領域」とする中国・日本と、西洋とも言語体系は違うが、各言語とも、「遊び」とは、「人の心をすっかり奪ってしまう」(ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』1938年)「自由な…時間・空間に限定され分離した…あらかじめ結果が分からない不確定な…非生産的な…それだけのルールに従う…非現実という意識を伴う虚構的な活動」(ロジェ・カイヨワ『遊びと人間』フランス1958年)であることは、同じです。

遊びの世界は、ハレ(晴レの日・聖)とも、ケ(褻の日・日常)とも違う、自由で自分が自分である幸福な世界であり、神の領域に属する理想郷でもあります。北彰介先生は、子どもの遊びに理想社会「心の故郷」を夢みたのだと思います。

化石というと、ふつう過去の生物の殻や骨が石のように硬くなったものを思い浮かべると思いますが、詳しくは体化石と生痕化石に区別されています。体化石は、生物の遺骸やその一部（殻や骨など）が地層中に保存されたもので、古い時代のものであれば長い年月の間に石のようになったものもあります。生痕化石は、地層中に失われること無く残されている生物の生活の記録で、巣穴や足跡といったものがあります。

体化石からは、その生物の形態を知ることができますが、どのような生活をしていたかはわかりません。生痕化石からは、生痕を残した生物が体化石として一緒に発見されることがあれば、その生物の生活のようすを知ることができます。しかし、そのようなことはまれで、たいていは生痕化石のみが見つかります。ですから、生痕化石がどんな生物のものかを知るためには、現生生物の生痕を調べることが大変重要です。生痕化石の研究は、犯行現場に残された指紋や足跡から犯人やその行動を特定していくことに似て、いろいろな推理をはたらかせる面白さがあります。

県内では、海底に土砂が堆積してできた地層の中に、海底にすんでいた生物の巣穴が発見されることが多く、各地で見ることができます。

(島口 天)



東北町の土場川流域に分布する数十万年前の地層から発見された巣穴の化石です。直径3cm程の筒状で、褐鉄鉱に置換されています。生物は不明。

郷土の先人⑱

独自の世界を築いた日本画家 野澤 如洋 (のざわ じょよう)

1865(元治2)～1937(昭和12) 弘前市出身 本名 三千治 (みちじ)

幕末、弘前藩士の家に生まれた如洋は、幼い頃から家族を驚かすほどの絵の才能をみせていました。そこで、隣町の絵師三上仙年(1835～1900年：弘前藩士、明治初期の弘前画壇の第一人者)に学び、はじめ仙蘭と名のりました。その後、日本画壇の中心地であった京都に移り、各種の展覧会に出品し、連続入選を続けました。その実力は、横山大観(1868～1958年)らと並び称され、東京美術学校の卒業生ら、いわゆるエリートたちにひけをとらない高い評価を得ます。そして、1907(明治40)年に発足した文展(文部省美術展覧会)の審査員に推せんされますが、審査のあり方などに疑問を抱いていた如洋は、これを辞退し、その後、展覧会への出品も行わず、独自の道を歩み続けました。これは、自己の信ずる画の道に突き進む、津軽らしい強い意志の現れといえるものでした。

中国に渡って、水墨画の本質に触れ、さらに欧米諸国を歩いて異なる文化、風土から得た刺激は、画風に新たな展開をもたらしました。

山水、花鳥、人物などあらゆる題材を水墨画法で描き、日本画に独自の世界を築き上げました。また、好んで馬を描き、「馬の如洋」と称されました。

(太田原慶子)



写真：妻や弟子らにあてたハガキ。昭和3～10年。(当館所蔵)



～2007年度の企画展・特別展一覧～

3月24日(金)～4月22日(日)
北京故宮博物院展
清朝末期の宮廷芸術と文化

4月28日(土)～5月27日(日)
オモチャ博覧会
安田勝寿コレクション展

6月9日(土)～7月16日(月)
第2回北東北三県共同展
北東北自然史博物館
大地と生きものふしぎ旅行

7月28日(土)～8月7日(火)
県人作家による八甲田山展
八甲田山を描いた美術作品を展示。

8月15日(水)～9月17日(月)
よみがえれ北前船
北国の海運と船展
かつて日本海で活躍した北前船を中心に紹介。

9月22日(土)～10月21日(日)
花の肖像画
青森県の植物画展
忠実に描いた植物画が持つ魅力を紹介。

10月27日(土)～11月25日(日)
放浪の天才画家
山下清展
放浪の画家として知られる山下清の作品を一堂に集めて紹介。

オモチャ博覧会
～安田勝寿コレクション展～



おもちゃに囲まれた安田氏

「おもちゃ」の語源は「手にもってあそぶもの」という意味の「もちあそび」に由来するといわれます。実際には自分よりも大きな自動車や飛行機がダウンサイズされ、手のひらの上で自在に操ることができます。子供たちは、この小さなおもちゃの世界のなかで、大きく想像力をはたらかせるのです。

昭和30年代以降は、テレビの登場によってブラウン管のヒーローがおもちゃの世界を一層にぎわせてくれました。

しかし、大量消費時代はこれらのおもちゃが使い捨てられる時代でもありました。安田勝寿さんは、このような運命を持つおもちゃをひとつでも多く次世代に継承したいという一念で、この20年来こつこつとおもちゃの収集をしてきました。今回はそのおもちゃコレクションのなかから約2,000点のおもちゃを展示します。

開催期間：平成19年4月28日(土)～5月27日(日)
観覧料：常設展観覧料でご覧になれます。

(一般310円、高校・大学生150円、小・中学生は無料)

主催：青森県立郷土館

第2回北東北三県共同展
北東北自然史博物館
～大地と生きものふしぎ旅行～



イワキサングジラ化石産状

この展示会は、北東北三県の県立博物館が収集した多くの実物資料をもとに、共同で行う展示会です。北東北三県の5億年に及ぶ大地の歴史と生物の多様性を概観できます。岩木山から発掘されたイワキサングジラ、岩手県のマエサワクジラやミズホクジラの化石をはじめ、もう生きた姿を見ることのできないニホンオオカミの剥製、秋田県のクニマス標本など、興味深い資料が多数展示されます。当館で展示後、秋田県、岩手県と順次開催されます。

開催期間：平成19年6月9日(土)～7月16日(月)

観覧料：一般500円(前売400円)、高校・大学生240円(前売200円)
小・中学生は無料

主催：北東北三県共同展実行委員会

青森県立郷土館、岩手県立博物館、秋田県立博物館

東奥日報社、岩手日報社、秋田魁新報社

総合博物館 青森県立郷土館だより Vol. 38 No. 1 通巻140号 2007.4.1

編集・発行 総合博物館 青森県立郷土館

〒030-0802 青森市本町二丁目8-14 TEL (017) 777-1585(代)

ホームページ <http://www.pref.aomori.lg.jp/kyodokan/>

